

フランス語における R-Tous と L-Tous について — イタリア語の並行事象との比較において —

石 岡 精 三*

Some Notes on R-Tous and L-Tous in French

— Mainly Focussing on the Comparison with the Italian Counterparts —

Seizo ISHIOKA

Key Words: Universal Quantifier Phrase (QP), SUBJECT, X⁰ Binding

0. はじめに

以下の (1) と (2) で判明するように, Universal Quantifier Phrase は, それ
が基底生成された位置から上位の位置へ移動可能である。

- (1) a. tous_i les enfants_i ont vu ce film¹⁾
b. les enfants_i ont tous_i vu ce film (Doetjes 1992: 1a)
c. ?*les enfants_i ont vu ce film tous_i (ibid.: 8b)
'all the children have seen this movie'
- (2) a. elle a voulu les_i lire tous_i (Jaeggli 1982: p. 67, 2. 18a-c)
b. elle a voulu tous_i les_i lire
c. elle a tous_i voulu les_i lire
'she wanted to read them all'

(1) において, 主語要素 (*tous les enfants*) は VP に左方付加した位置に生成される。²⁾Kayne (1975, 1984) の用語を用いて, QP の一部 (*les enfants*) が Case Filter の要請から上位の位置に移動することにより残置された QP が基底生成された位置から上位の位置へ移動する事象を R-Tutti と呼ぶ。(2b-c) のように, QP の一部が Case Filter 以外の要因以外で移動することにより残置された QP の移動を L-Tous と呼ぶ (後述するように, 両事象において残置さ

原稿受付: 平成 6 年 6 月 10 日

*長岡技術科学大学語学センター

れたQPが基底生成された位置にとどまる可能性もある)。Giusti (1991)と同様に、上の(1)と(2)におけるQPの構造として(3)を想定し、Universal QuantifierがDefinite DPを下位範疇化すると考える。

(3) [_{QP} SPEC (Q) [_Q'Q [_{DP} SPEC (D) [_D'D [NP . . .]]]]]

R-TousとL-Tousは、Q(Quantifier)によって選択されるDPが何らかの引き金(Trigger)によって上位位置へ移動する場合に発動する。(1b)では、主語DP(QP)((*tous*) *les enfants*)に対するCase Filterの要請により、当該主語要素がmatrix SPEC(Agr)位置へ移動する。³⁾同様に、(2)において、DPと考えられるclitic(*les*)は機能範疇の主要部位置へ付加移動する(この付加移動(Cliticization)は、義務的に発動する)。⁴⁾本稿では、この両事象を共通に説明すると思われる論法が提示される。具体的には、それが下位範疇化するDPの移動によって残置されたQPが、一定条件の下で、基底生成された位置から上位のSPEC位置へ移動すると想定される。

第1節では、R-Tousの詳細が検討され、特にFaire使役構文に生起する用例が取り扱われる。第2節では、本稿で検討されるL-Tousの用例が提示される。特に、Restructuring Construction(RESTR)とRaising Constructionにおける挙動が検討される。第3節において、R-TousとL-Tousの双方を説明すると思われる仮説群が提案され、本稿の仮説群による予測体系が示される。第4節では、DPの移動によって残置されたQPの移動とWH要素移動の相互関係が考察される。第5節では、対応するイタリア語における事象との相違を考察する。第6節は結語を構成する。

1. R-Tous

1.1. 最初に、(1)を検討する。(1a)は、QP全体がmatrix SPEC(Agr)位置へ移動した場合の派生である。(1b)は、Q(*tous*)によって下位範疇化されるDPのmatrix SPEC(Agr)への移動によって残置されたQP(*tous*)が基底生成された位置から上位のSPEC位置へ移動した派生として説明される(移動先のSPEC位置に関しては後述する)。(1c)の非文性は何を物語るのだろうか。一般的に、[+Finite] AgrP内の主語要素はVPに左方付加した位置に生成される。(1c)では、主語QPがVPに右方付加した位置に生成されると考えられる(QP(*tous*)がVのComplement(*ce film*)に後続する)。以下の(4)

で示されるように, Stylistic Inversion の事例において, 主語要素は VP に右方付加した位置に生成可能である。

- (4) a. que voulait manger ce jeune homme ? (Kayne 1973: 5)
 b. *que voulait ce jeune homme manger ? (ibid.)
 'what did this young man want to eat ?'
 c. *quand ont tous dormi les enfants ? (Doetjes 1992: 7)
 d. quand ont dormi tous les enfants ?
 'when did all the children sleep ?'

つまり, (1c) の非文性を主語 QP (*tous les enfants*) が基底生成される位置に還元することはできない。本稿では, イタリア語に対して設定した仮説をフランス語にも適用する (詳細は, 石岡 (forthcoming) を参照されたい)。

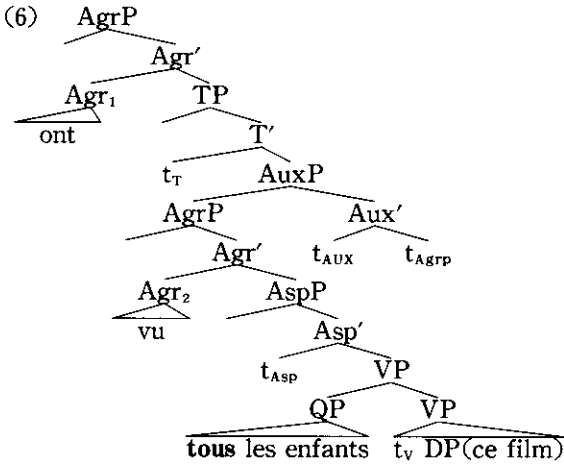
(5) Hypothesis :

In Italian and French, only a subject Universal Quantifier whose maximal projection (QP) is base-generated in the left VP-adjoined position allows its sister DP to move from within the QP.

よって, (1c) において, DP (*les enfants*) の移動によって QP (*tous*) が残置される可能性はない。対応して, 残置された QP (*tous*) の移動も排除される。同様の論法により, (4c) の非文性が説明される。

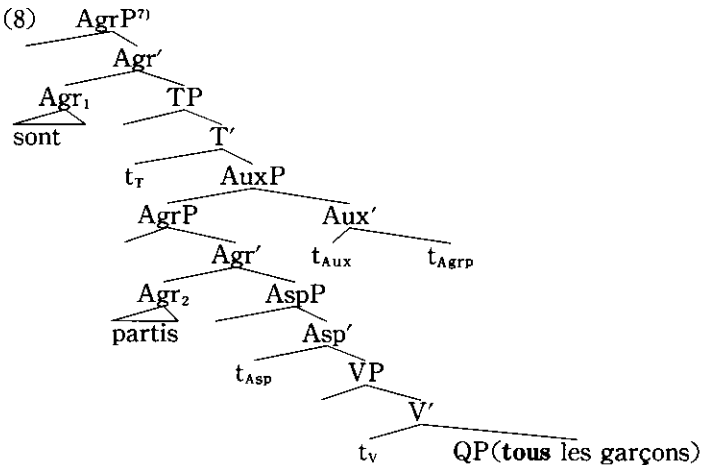
(1b) において, 残置された QP (*tous*) はどの SPEC 位置へ移動するのであろうか。(1) に対応する構造 (6) を検討する。emdbd. V が Asp 位置へ移動することにより, 過去分詞形態 (*vu*) が生成する。この過去分詞形態は, Agr₂ 位置へ移動して, その主要部移動を停止する。一方, Aux 要素は, T を経て Agr₁ 位置へ移動し, 定動詞形態 (*ont*) が生成する。⁵⁾

主語 DP(QP) は, SPEC(Agr₂) を通過しないと考えられる。⁶⁾ つまり, (1b) において残置された QP (*tous*) は, SPEC (T) 位置へ移動すると考えられる。Faire 使役構文における R-Tous の箇所ですべて述べるように, 一般的に, 残置された QP は, それが基底生成された位置にとどまる可能性をもつ。その場合, 以下の (7a) が生成されることになる (これは, 残置された QP が SPEC (Asp) 位置へ移動した場合の派生と同形である)。



- (7) a. les enfants_i ont vu tous_i ce film
 'all the children have seen this movie'
 b. les garçons_i sont tous_i partis à la guerre (Quicoli 1976: 2)
 c. les garçons_i sont partis tous_i à la guerre (ibid.: 3)
 'all the boys have left for the war'

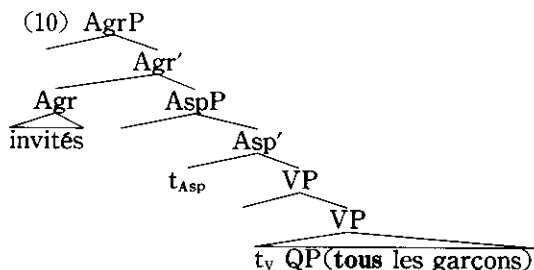
(7a)に対する予測の適格性は、(7c)によって例証される。UnaccusativeVerb (*partir*)を含む(7c)の構造として、以下の(8)が想定される。



DP (*les garçons*) は SPEC(Agr₁) 位置へ移動する。この移動は、SPEC(Agr₂) を経由して発動すると考えられる(過去分詞形態が主語 DP と性・数に関して一致する)。残置された QP (*tous*) が基底生成された位置にとどまる場合には、(7c) が生成する(当該 QP が SPEC(V), あるいは SPEC(Asp) 位置へ移動した場合も同様)。また、QP (*tous*) が SPEC(T) 位置へ移動した場合には、(7b) が生成する(SPEC(Agr₂) 位置に主語 DP の痕跡が生起するため、QP の当該 SPEC 位置への移動は排除される)。Unaccusative Verb の場合と同様に、matrix SPEC(Agr) 位置へ移動する QP (DP) が V の sister 位置に生成される受動構文における R-Tous ではどのような状況であろうか。

- (9) (Jaeggli 1982: p. 64, 2. 6a-e)
- a. (presque) tous les garçons ont été invités
 - b. *les garçons (presque) tous ont été invités
 - c. les garçons ont (presque) tous été invités
 - d. les garçons ont été (presque) tous invités
 - e. ?*les garçons ont été invités (presque) tous
- ‘(almost) all the boys have been invited’

(1) と (7) を説明する論法は、(9a, c, d) を適切に文法的と予測する。DP の移動によって残置された QP (*tous*) は、最下位に生起する Agr の SPEC 位置を除いた上位の SPEC(T) 位置へ移動する。(9b) は、matrix SPEC(Agr) と SPEC(T) の間に、当該 QP が移動する SPEC 位置が存在しないため、非文と予測される。問題となるのは、(9e) の非文性である。(7) を説明する論法では、(9e) が文法的と予測される。(9) の構造を検討する(最下位の AgrP 構造のみを示す)。



DP (*les garçons*) が SPEC (Agr) を経由して matrix SPEC (Agr) 位置へ移動した場合、残置された QP (*tous*) は、基底生成された位置にとどまる、あるいは、embd. SPEC (V) (SPEC (Asp)) へ移動するはずである。実際には、この可能性は実現されない。この問題は、能格動詞 (Unaccusative Verb) による完了時制と受動態で、過去分詞の一致形式が異なると前提することにより打開可能と考えられる。ここで、以下の仮説を設定する。

(11) Hypothesis :

With respect to a universal quantifier phrase QP, the whole QP or the DP subcategorized by Q moves to the SPEC of Agr adjoined to by an unaccusative verb, while the whole QP moves to the SPEC of Agr subcategorized by a passive Aux.

結果として、構造(10)において、QP (*tous les garçons*) 全体が SPEC (Agr) 位置へ移動した段階で、DP (*les garçons*) が matrix SPEC (Agr) 位置へ移動することになる。よって、(10) の SPEC (V), SPEC (Asp) 位置に (残置された) QP が生起する可能性はない(仮説(11)は、(7)をも説明可能である)。

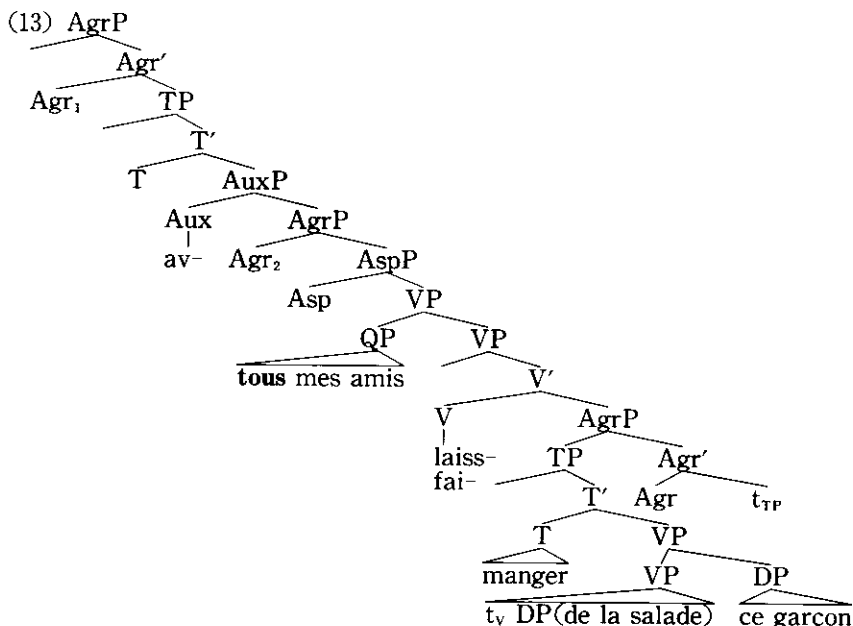
1.2. 本節では、DP の移動によって残置された QP が基底生成された位置にとどまる可能性を例証する。

- (12) a. tous mes amis ont fait/laissé manger de la salade à ce garçon
 (Quicoli 1976: 16a-c)
 b. mes amis ont tous laissé/fait manger de la salade à ce garçon
 c. mes amis ont laissé/fait manger tous de la salade à ce garçon
 d. mes amis ont laissé/fait tous manger de la salade à ce garçon
 'all my friends have let/made this boy eat the salad'

石岡 (1993, 1994) と同様に、使役動詞 (*fai-, laiss-*) は AgrP を下位範疇化すると考える。⁸⁾ embd. V の T 位置への移動により不定法形態が生成される。この不定法形態を含む T の複合体は、上位の Agr 位置(後述するように、厳密には、Agr⁻¹ の sister 位置にある Morphologically Selected Slot (MSS) 位置)へ移動することはないと考える。当該要素が移動した Agr がその sister 要素を

L 標示しないためである(不定法 AgrP における TP は「障壁」(Barrier)を構成する)。TP の「障壁」性は、当該 TP が直接上位にある Agr の SPEC 位置へ空移動することにより相殺される。この空移動により、matrix V (*fai-*) は、T 位置にある不定法形態を統率可能となる。Reed (1990) と同様に、この統率関係によって生成した一種の合成動詞を動詞統率連鎖 (Verbal Government Chain, VGCH) と呼ぶ。これらの前提により、(12) は以下の構造 (13) をもつことになる。⁹⁾

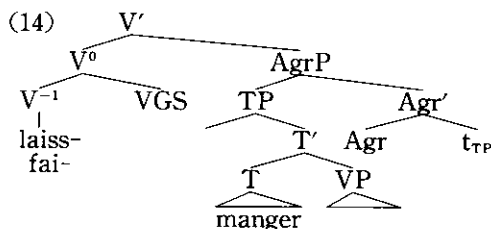
Aux 要素は、matrix Agr 位置へ移動する。matrix V (*laiss-*) は、Asp を経由して Agr₂ 位置に移動し、その移動を停止する。embd. V (*mange-*) もまた、embd. T 位置へ移動し、その主要部移動を停止すると考えてみよう。



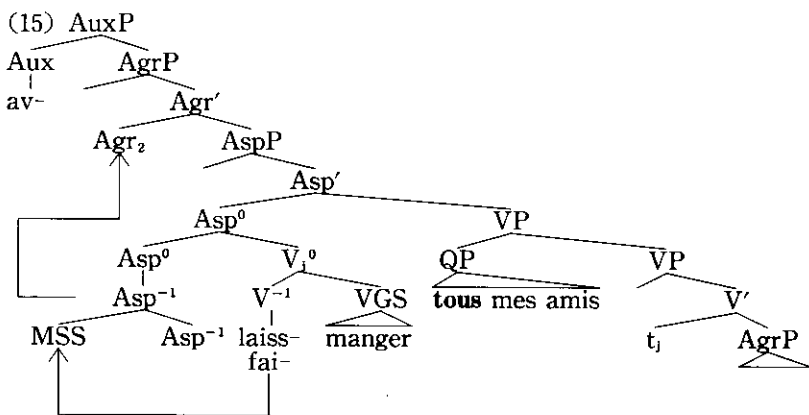
その場合生成されるのは、(12a, b, d) であり、(12c) は生成不能である。(12b) は、DP (*mes amis*) の移動によって残置された QP (*tous*) が SPEC (T) 位置へ移動した派生として説明される。(12d) では、残置された QP が基底生成された位置にとどまる、あるいは、当該 QP が SPEC (Asp) 位置へ移動すると考えられる。(13) の構造から、QP が不定法形態の動詞に後続する出力を得

ることは不可能である。

本稿では、何らかのプロセスにより、embed. T 位置にある不定法形態が上位の位置へ移動すると考える。具体的には、使役構文を導入する V (*fai-*, *laiss-*) に対して、以下の構造を想定する。¹⁰⁾



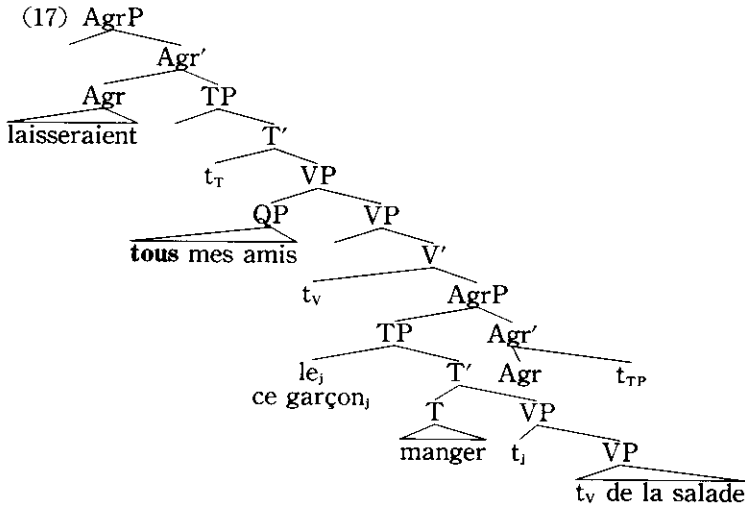
VGS (Verbal Government Slot) は matrix V^{-1} によって統率される不定法形態が移動する Slot を表す。VGCH による格付与が適用された段階で、不定法形態の動詞が当該 VGS に移動する点に留意されたい。matrix V^0 全体が直接上位にある X^0 範疇 (Asp^0) に付加移動し、次いで、matrix V^{-1} (*laiss-fai-*) が Asp 位置を経由して Agr_2 位置まで移動する (言うまでもなく、Aux (*av-*) は T を経て Agr_1 位置へ移動する) (Guasti 1991)。¹¹⁾つまり、(15)の構造が生成される。(12c) は、FQ (QP) (*tous*) が主語 NP の基底生成された位置にとどまる派生として生成されることになる。同様の論法により、(12a, b, d) は文法的と予測される。



次に、以下の(16)を検討する。

- (16) a. tous mes amis laisseraient ce garçon manger de la salade
 (Quicoli 1976: 38, 37)
- b. *mes amis laisseraient ce garçon manger tous de la salade
 'all my friends would let this boy eat the salad'
- c. mes amis lui laisseraient manger tous de la salade (ibid.: 44)
 'all my freinds would let him(dat) eat the salad'
- d. *mes amis le laisseraient manger tous de la salade (ibid.: 57)
 'all my freinds would let him(acc) eat the salad'

(16a, b, d)の構造として、以下の(17)が想定される。embd. AgrP内の主語DP(*ce garçon*)にはAccが付与されている。つまり、(16a)ではVGCHが形成されていない。embd. SPEC(T)位置へ移動したDP(*le, ce garçon*)にAccを付与する要素は、matrix V(*laiss-*)である。VGCHが形成された場合に限り、VGS位置が生成すると考えられる。よって、(17)において、不定法形態の動詞は、embd. T位置にとどまることになる。つまり、残置されたQP(*tous*)が不定法形態に後続する派生は生成不能である(非文と予測される)。これにより、(16b, d)の非文性が説明される((16a)では、QP(*tous mes amis*)全体がmatrix SPEC(Agr)位置へ移動している)。(16c)において、embd. AgrP内部の主語DPは、Datを付与されている。つまり、(16c)では、VGCHによる格付与が発動している。結果として、当該用例は、(12c)と同様に、DP移動によって残置されたQPが基底生成された位置にとどまる場合の派生として説明される。



(16b, d) に対応する文法的な派生として、以下の (18) が考えられる。¹²⁾

- (18) a. mes amis laisseraient tous ce garçon manger de la salade
 b. mes amis le laisseraient tous manger de la salade
 'all my friends would let this boy/him(acc) eat the salad'

2. L-Tous

2.1. 第1節において、DPの移動によって残置されたQPが基底生成された位置にとどまる可能性と、さらに上位のSPEC位置へ移動する可能性が示された(R-Tous)。第2節では、DP (clitic)の移動によって残置されたQPがR-Tousに類似する挙動を示すことが指摘される。以下のフランス語とイタリア語用例からも判明するように、QP (*tous*, *tutti*)はそれが基底生成された位置から移動する(基底生成された位置にとどまる可能性もある(19c-d))。

- (19) a. je les ai tous lus (Quicoli 1976: 4)
 b. li ho tutti letti
 'I have read them all'
 c. je les aime tous (Milner 1987: 22b)

d. li amo tutti

'I love them all'

e. *Jean a tous vu mes amis (Quicoli 1976: 7)

f. *Gianni a tutti visto i miei amici

'Jean/Gianni has seen all my friends'

(19e-f)は、DPの移動によって残置された場合に限り、QPが上位のSPEC位置へ移動可能であることを示す。(19a-b)において、残置されたQPの移動先と想定されるのは、SPEC (T)位置である。また、残置されたQPが基底生成された位置にとどまる場合と、SPEC (Asp)位置へ移動する場合には、(20)が派生する。

(20) a. je les ai vus tous

b. li ho letti tutti

'I have read them all'

Sportiche (1988)の論法によると、R-TuttiとL-Tuttiは異なるプロセスによって説明される。しかしながら、本稿の第1節と上の(19-20)は、両事象が類似のプロセスによって説明される可能性を暗示する。¹⁹⁾本稿では、主としてフランス語、イタリア語とスペイン語の使役構文での接語化(Cliticization)を説明するX⁰ Binding (XP Binding)による論法が提案される(第3節)。

2.2. 最初に、QP (*tout*)の挙動を観察する。

(21) a. Jean a mangé tout (Quicoli 1976: 6-7)

b. Jean a tout mangé 'Jean has eaten everything'

c. il lui laissera manger tout (ibid.: 10-11)

d. il lui laissera tout manger

'he will let him(dat) eat everything'

e. je voudrais lui laisser tout manger (ibid.: 12-13)

f. je voudrais tout lui laisser manger

'I would like to let him(dat) eat everything'

g. j'ai tout voulu lui laisser manger (ibid.: 14)

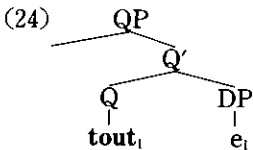
'I have wanted to let him(dat) eat everything'
 h. *j'ai tout voulu que Marie mange (ibid.: 18)

- 'I have hoped that Marie will eat everything'
 (22) a. elle a voulu lire tout (Quicoli 1976: 26)
 b. elle a voulu tout lire (ibid.)
 c. elle a tout voulu lire (ibid.)

- 'she has wanted to read everything'
 (23) a. *j'ai tout laissé Jean manger (Quicoli 1976: 35-36)
 b. j'ai laissé Jean manger tout
 c. j'ai tout laissé manger à Jean (ibid.: 39-40)
 d. j'ai laissé manger tout à Jean

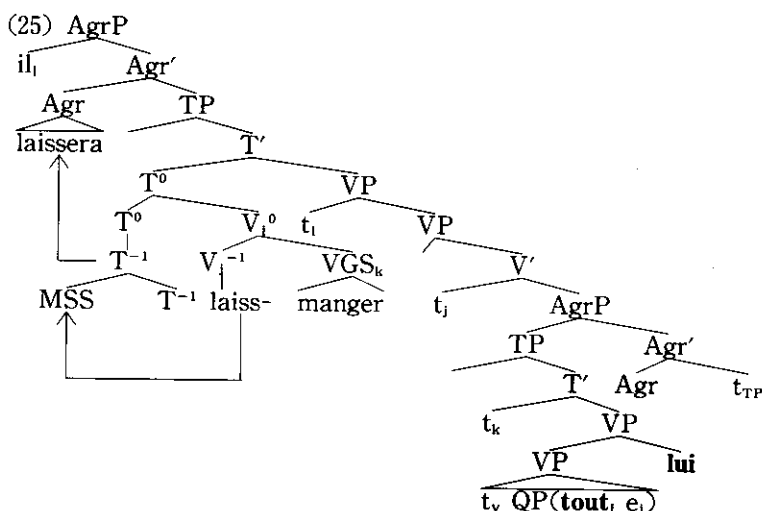
- 'I have let Jean eat everything'
 e. je voudrais tout lui laisser manger (= (21f)) (ibid.: 54-55)
 f. *je voudrais tout la laisser manger
 'I would like to let her(dat, acc) eat everything'

そもそも、QP と想定される要素 (*tout*) が移動する要因は何であろうか。本稿では、Q によって下位範疇化される DP が何らかの要因によって移動した場合に、QP の移動が発動すると考えている。ここで、フランス語の中性 QP(*tout*) は、(24) の構造をもつと想定する。つまり、Q (*tout*) が空である clitic (*e*) を下位範疇化すると想定する。



この空の clitic (*e*) が、SPEC (Q) 位置を經由して機能範疇の主要部に付加移動する。この移動により、残置された QP (*tout*) が上位の SPEC 位置へ移動可能となる。(21a-b) の構造は、(8) に類似するものである。つまり、(21a) において、残置された QP (*tout*) は基底生成された位置にとどまる、あるいは、SPEC (Asp) 位置まで移動する。(21b) 中の QP は SPEC (T) 位置まで移動する。(21c-d) において、embd. AgrP 内の主語 clitic は Dat を付与される(つ

まり, VGCH による格付与が発動している). その構造として, 以下の(25)が想定される.



主語 clitic (*lui*) は, 定動詞 (*laissera*) が位置する matrix Agr へ付加移動する (空の clitic (*e*) も同様). つまり, (21c) は, 残置された QP (*tout*) が基底生成された位置にとどまる, あるいは, embd. SPEC(V)から matrix SPEC (V)の位置へ移動した派生として説明される. (21d)の派生では, QP が SPEC (T)位置へ移動する (不定法形態 (*manger*)が生起する位置に留意されたい).

(21e-h)の検討に先立ち, RESTR Constructionである(22)と以下の(26)の構造を考える必要がある.

(26) a. elle a voulu les lire tous (Jaeggli 1982: p. 67, 2. 18a-c)

b. elle a voulu tous les lire

c. elle a tous voulu les lire

'she wanted to read them all'

具体的には, 以下の(27)の用例に検討を加える((28)は, 対応するイタリア語用例である). Ouhalla (1989)と同様に, フランス語の RESTR Verbは CPを下位範疇化すると考える.¹⁴⁾つまり, (27)に対して, (29)の構造が想定

される。語彙的に実現されないCは、その sister 要素(AgrP)をL 標示しないと考えられる(AgrP=Barrier)。AgrPの「障壁」性は、当該AgrPがSPEC (C)位置へ移動することにより相殺される(この「障壁」性の相殺は、embd. AgrP内部に生成されたWH要素の移動を可能にするため必要となる)。

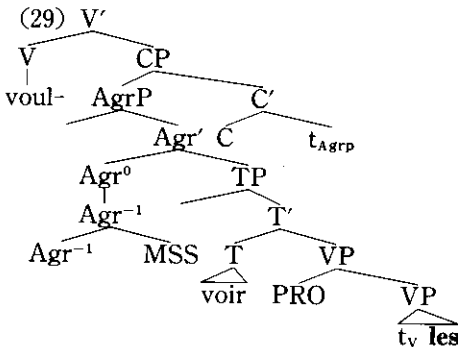
(27) a. *Jean les veut voir

b. Jean veut les voir 'Jean wants to see them'

(28) a. Gianni li vuole vedere

b. Gianni vuole vederli 'Gianni wants to see them'

(27)に対して、以下の(29)の構造が想定される。[+Finite] Agr⁻¹同様、embd. Agr⁻¹が、MSS位置をもっている点に留意されたい(フランス語の不定法CPにおいて、語彙的要素を内包するゼロ範疇が移動したAgrがそのsister要素をL 標示しないと前提される。つまり、通常、不定法形態はT位置にとどまる)。基底生成された位置にあるclitic (*les*)は、embd. Agr位置へ付加移動する。この移動はどのように説明されるか、cliticの痕跡がAnaphorであると考え、以下の定義体系(30-34)を前提する(cliticの痕跡がX⁰ Bindingに従うと考える)。



(30) Binding Principle A (X⁰ Binding):

The trace of a clitic is bound by its antecedent in its governing category (GC).

(31) The definition of X⁰ Binding:

YP is bound by X⁰ iff YP and X⁰ are coindexed and X⁰ c-commands YP

(c-command being defined with respect to a branching node X' or XP).

(32) The definition of Governing Category(GC):

β is a governing category for α iff β is the **minimal functional XP** containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α (cf. Aoun 1985).¹⁵⁾

(33) The definition of SUBJECT:

The SUBJECT consists of an **independent Agr in situ** or of a subject assigned Acc Case (including its trace) which is in its base position or has moved from its base position to a SPEC position to fulfill Case Filter.

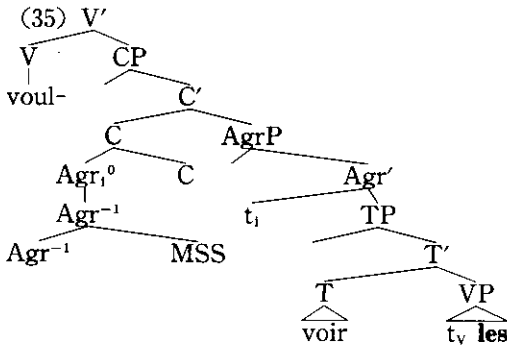
(34) Clitic Placement Constraint(CPC):¹⁶⁾

A clitic must adjoin to the highest functional X^0 element in its governing category, (general principles of UG allowing). (adapted from Ouhalla 1989:24).

Independent Agr in situ は、TP を下位範疇化する Agr であり、基底生成された位置にある Agr⁰である(イタリア語の場合、T の複合体を内包するこの Agr⁰は、その sister 要素(TP)をL 標示する)。さらに、格付与において、上位の X^0 範疇に依存しない要素を意味する。よって、[+Finite] [±Subjunctive] AgrP の主要部、さらに、VGCH が形成されない場合の知覚構文(Laisser 使役構文)における embd. AgrP の主要部がその例である。一方、Faire 使役構文における embd. AgrP の主要部と Aux に下位範疇化される Agr は、当該 **Independent Agr in situ** ではない。

(29) における Agr は、**Independent Agr in situ** である(よって、大主語(SUBJECT)として機能する)。つまり、基底生成された位置にある clitic(*les*) に対して GC となるのは、当該 embd. Agr の最大投射である。結果として、当該 clitic は、その統率範疇(GC) (AgrP) 内にある最上位の機能範疇の主要部(Agr)位置へ付加移動することになる。clitic 要素が付加移動した Agr はその sister 要素(TP)をL 標示すると考えられる。これにより、embd. T 位置にある不定法形態(*voir*)の MSS 位置へ移動が可能になる(これにより、当該 clitic と不定法形態との Liaison が説明される)。

RESTR Verb の特徴として、embd. Agr⁰全体の C 位置への付加移動が挙げられる。これは、以下の構造を生成する。



前述のように、基底生成された位置にある Agr は、その sister 要素 (TP) を L 標示しない。また、C に付加移動した Agr は、語彙的要素を内包するものではない。よって、当該 Agr が移動した C は、その sister 要素 (AgrP) を L 標示しない。結果として、*embd. TP* と *embd. AgrP* が「障壁」となる。基底生成された位置にある clitic (*les*) に対して SUBJECT として機能する要素は、*matrix Agr* である (*embd. Agr* は **Independent Agr in situ** でない)。つまり、*matrix AgrP* が当該 clitic の GC となる。当該 clitic の *matrix Agr* への付加移動は許容されない (*embd. TP* が「障壁」である)。UG の原理 (空範瞬原理 (ECP)) を満たすため、当該 clitic は、不定法形態が生起する *embd. T* へ左方付加することになる。

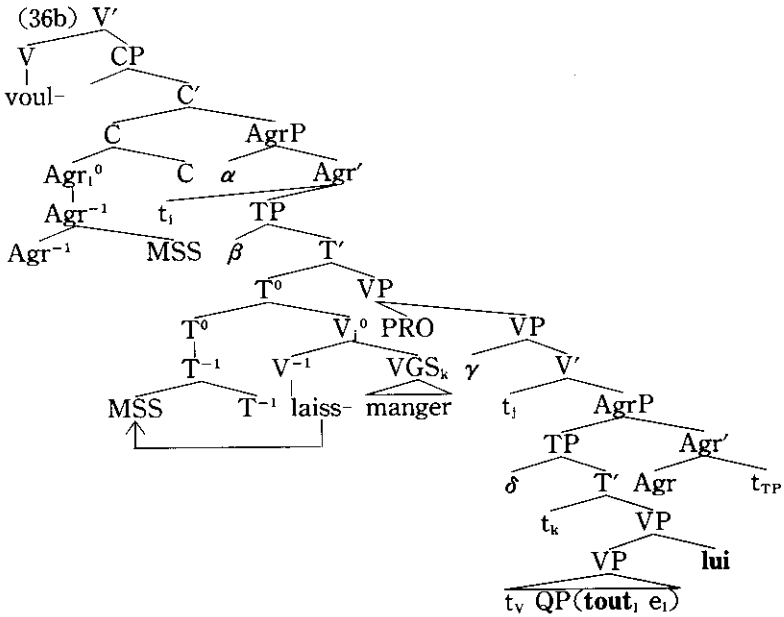
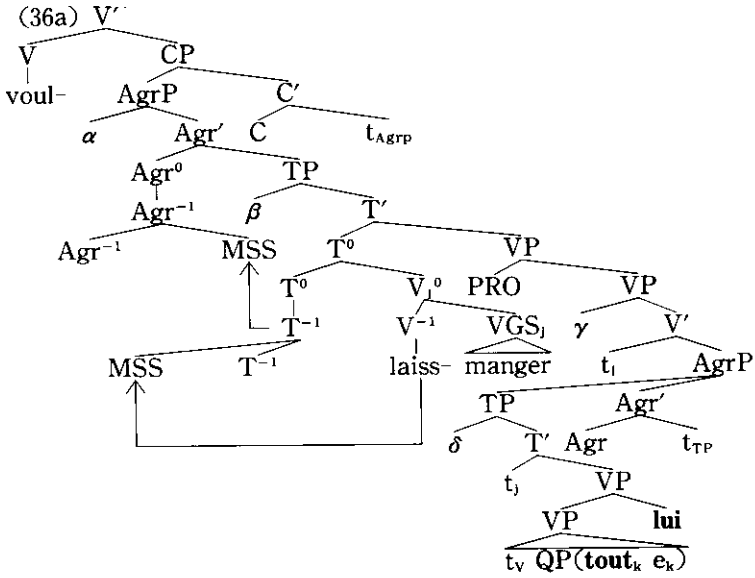
X⁰ Binding の定義体系 (30-34) は、(27) の相違を説明すると考えられる。Belletti (1990) が指摘するように、イタリア語の不定法 CP における V は、T を経て Agr 位置まで移動する。よって、(35) に対応する構造における CP 内部には如何なる「障壁」も存在しない (*matrix V* と *matrix Agr* の間にも「障壁」が介在しない)。これは、イタリア語用例 (28a) を文法的と予測する (*matrix AgrP* が clitic (*li*) の GC となる)。(28b) は、概略 (29) の構造に対応する (*embd. AgrP* が clitic (*li*) の GC となる)。¹⁷⁾

(26a-b) は、(29) と (35) の構造の双方から派生可能である。(29) の構造に基づく (26a) は、残置された QP (*tous*) が基底生成された位置にとどまる派生、あるいは、*embd. SPEC (V)* (*embd. SPEC (T)*) 位置へ移動する派生として説明される。(35) に基づく (26a) は、残置された QP が基底生成された位置にとどまる派生、あるいは、*embd. SPEC (V)* 位置へ移動する派生と考えられる。(29) に基づく (26b) の派生では、QP (*tous*) が *embd. SPEC (Agr)*、

あるいは、その上位にあるいくつかの SPEC 位置へ移動する。(35)に基づく派生では、QP が embd. SPEC (T) 位置に移動する (embd. TP が「障壁」を構成するため、QP が当該 SPEC (T) よりも上位の SPEC 位置へ移動することはない)。embd. TP が「障壁」を構成するため、(26c) は (35) の構造から生成不能である。(29)に基づく(26c)は、QP (*tous*) が matrix SPEC (T) 位置へ移動した派生と解釈される (matrix AgrP は、(8) に類似する構造をもつ)。(26) で観察されたことは、(22) にも当てはまる。

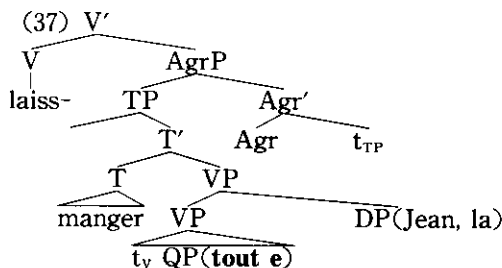
これまでの考察でも判明するように、残置された QP の挙動は、clitic のそれと異なるものである。仮説群(30-33)によって決定される clitic の移動上限(局所性)は、QP の局所性とは異なるものである。つまり、QP の局所性を仮説群(30-33)によって決定することはできない(QP の局所性を規定する仮説群に関しては後述する)。

(21e-g) の構造として、以下の(36a-b)が想定される。(36a-b)は、それぞれ構造(29)と(35)に基づくものである。embd. V (*mange-*) に対する主語 clitic (*lui*) は Dat を付与される。つまり、VGCH による格付与が発動している(VGS も生起する)。(36a)において、embd. V の主語 clitic (*lui*) と空の clitic (*e*) に対して SUBJECT として機能するのは、SPEC (C) へ空移動した AgrP の主要部である(同じ AgrP が当該 clitic の GC となる)。つまり、当該主要部への Cliticization が発動する。(36a) の構造としての(21e)は、QP (*tout*) が β 位置へ移動した派生として説明される。(21f)は、当該 QP が α 、あるいは、それよりの上位の SPEC 位置へ移動する派生である。(21g)では、当該 QP が matrix SPEC (T) 位置まで移動する。この場合も、clitic に対する局所性と QP のそれが異なる要因によって規定されることが示される。



(36b)において, embd. V の主語 clitic (*lui*) と空の clitic (*e*) に対して SUBJECT として機能するのは, matrix Agr である (matrix AgrP が当該 clitic の GC となる). t_1 の sister (TP) が「障壁」となるため, clitic (*lui*) と空の clitic (*e*) は, 不定法形態 (*laisser*) が生起する T 位置へ付加移動する. 不定法形態 (*laisser*) の位置と不定法形態 (*manger*) のそれとの間には SPEC 位置が存在しない. よって, (36b) の構造から (21e) を生成することはできない. 上の TP が「障壁」となるため, QP (*tout*) の移動は β 位置を上限とすることになる. よって, (21f) は, QP が β 位置へ移動した場合の派生となる. 同じ理由によって, (36b) の構造は (21g) を生成不能である. (21h) は, 何らかのプロセスによって, 残置された QP の移動上限が embd. AgrP (あるいは, embd. Agr') に設定された場合の派生である (詳細は, 後述する).

次に, (23) の用例を検討する. (23a-b) は以下の構造 (37) をもつと考えられる (簡略表示).



embd. V (*mange-*) の主語 (*Jean*) は, 基底生成された位置で Acc を付与されることはない. Case Filter の要請から, 当該主語要素は SPEC (T) 位置へ移動する. matrix V (*lais-*) が当該位置に移動した主語 (*Jean*) に Acc を付与する (この場合, VGCH は形成されない). (23a-b) の文法性判断によって示されるように, SPEC (T) 位置において Acc を付与される要素が QP の移動を制限すると考えられる. QP の SPEC (T) よりも上位の SPEC 位置への排除される (結果として, QP は基底生成された位置にとどまるか, embd. SPEC (V) まで移動する). (23f) の非文性は, 当該 SPEC (T) 位置へ移動し, Acc を付与された clitic の痕跡も同様の移動制限を課すことを示す. この移動制限は, 第 3 節において設定される仮説群によって適格に説明される.

2.3. ここで、Raising Construction における L-Tous の用例を検討する。

(38) a. elle a semblé les avoir tous lus (Quicoli 1976: 95)

b. *elle a tous semblé les avoir lus (ibid.: 96)

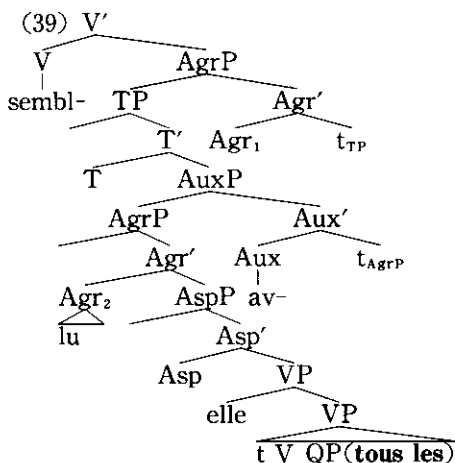
'she seemed to have read all of them'

c. *elle les a semblé avoir lus

d. elle a semblé les avoir lus

'she seemed to have read them'

Raising Construction において、主語要素は、embed. VP に付加した位置に生成される (matrix VP には主語要素が生成される Slot が存在しないと考える)。当該位置に生成された主語要素は、格が付与される位置 (この場合、matrix SPEC (Agr)) へ移動する (matrix V (*sembl-*) は、Acc を付与することはない)。Raising Verb が、Faire 使役構文と同様に、AgrP を下位範疇化すると考え、(38a-b) に対して以下の構造を想定する。



前述のように、Aux はその sister 要素を L 標示しない (当該 sister 要素 (AgrP) が「障壁」となる)。Aux (*av-*) は T 位置へ移動し、不定法形態 (*avoir*) が生成する (結果として、T はその sister 要素 (AuxP) を L 標示する)。つま

り、AgrPの「障壁」性は、当該範疇のSPEC (Aux) 位置への移動により相殺される。これにより、主語DP (*elle*) のmatrix SPEC (Agr) 位置への移動が可能となる(基底生成された位置にあるV (*sembl-*) とmatrix Agrの間には、如何なる「障壁」も介在しない)。

clitic (*les*) に対してSUBJECTとして機能する要素はmatrix Agrである(Agr₁は、基底生成された位置にあるclitic (*les*) をC統御しないため、SUBJECTとして機能することはない)。よって、matrix AgrPが当該cliticのGCとなる。結果として、clitic (*les*) は、Aux (*av-*) の最終着地点であるmatrix Agr位置へ付加移動することになる。(38c-d)で示されるように、この予測は事実に反する(clitic (*les*) は、Aux (*av-*) の不定法形態が生成されるembd. T位置に付加移動する)。どのような要因によって、clitic (*les*) のmatrix Agr位置への付加移動が阻止されるのか。

この問題は、embd. AgrPを越えてmatrix AgrP内部へ移動する要素が、(39)の構造におけるembd. SPEC (Agr) 位置へ空移動したTのSPEC位置を義務的に通過すると前提することにより打開される。

(40) Hypothesis : ¹⁸⁾

An XP element which is base-generated in the embd. AgrP (CP) with a matrix SPEC or Y⁰ position as its final landing site has to move through the SPEC position of the embd. TP vacuously moved to the embd. SPEC (Agr) .

前述のように、主語DP (*elle*) はmatrix SPEC (Agr) 位置まで移動する。この移動は、(39)の構造におけるSPEC (T) 位置を経由して発動する。結果として、その他の要素(この場合、clitic (*les*) とQP (*tous*)) のmatrix Agr (CP) 内部への移動が排除される。clitic (*les*) は、embd. TP内部にある最上位の機能範疇の主要部である(Aux要素の不定法形態が生起する) embd. T位置へ付加移動することになる。よって、(38a)の派生では、残置されたQP (*tous*) はembd. SPEC (Agr₂) 位置まで移動している(この場合、clitic (*les*) は当該embd. SPEC (Agr) を経由しない)。仮説(40)は、QP (*tous*) がembd. SPEC (Agr) を越えて移動する(38b)を非文と予測する。仮説(40)とこれまで設定された本稿の仮説群は、以下の予測を可能にする。

- (41) a. elle a semblé les avoir lus tous
 b. *elle les a semblé tous avoir lus
 c. *elle les a semblé avoir tous lus
 d. *elle les a semblé avoir lus tous
 e. *elle a tous semblé les avoir lus
 'she seemed to have read all of them'

(41a)は、QP(*tous*)が基底生成された位置にとどまる派生、あるいは、embd. SPEC (V) (embd. SPEC (Asp)) 位置へ移動した派生として説明される。後者の場合、clitic (*les*) が embd. SPEC (Agr₂) を通過する。

3. 提案 (仮説群) と予測体系

3.1. 残置されたQPの移動は、基本的にX⁰ Bindingに従うと考えられる。しかしながら、既に述べたように、残置されたQPの移動に対して、定義体系(30-34)を適用することはできない。具体的には、統率範疇(GC)の定義と、大主語(SUBJECT)の定義を修正する必要がある。以下に、残置されたQPに適用されるX⁰ Bindingの定義体系を示す(Tous X⁰ Binding).¹⁹⁾

- (42) Binding Principle A (Tous Binding):
 The trace of a stranded QP is bound by its antecedent in its governing category(GC).
- (43) The definition of X⁰ Binding (= (32)):
 YP is bound by X⁰ iff YP and X⁰ are coindexed and X⁰ c-commands YP (c-command being defined with respect to a branching node X' or XP).
- (44) The definition of SUBJECT:
 The SUBJECT consists of an **independent active Agr in situ** or of a subject assigned Acc Case (including its-trace) which is in its base position or has moved from its base position to a SPEC position to fulfill Case Filter.
- (45) The definition of Governing Category(GC):
 β is an X⁰-GC for a stranded QP(α) iff

- (i) β , which is not vacuously moved, is the minimal functional projection containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α , or
- (ii) β , which is vacuously moved, is the minimal functional maximal projection containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α

Active Agr とは、その MSS 位置に語彙的要素 (V を内包する T の複合体) の移動を受けた場合、その sister 要素を L 標示可能な Agr を指す(よって、イタリア語における不定法 AgrP (CP) 中の Agr は Independent Agr in situ であり、同時に Independent Active Agr in situ でもある)。前述のように、フランス語の不定法 AgrP (CP) 中の Agr は、その sister 要素を L 標示しない。よって、この場合の Agr は Independent Active Agr in situ でない。言うまでもなく、[+Finite] AgrP (CP) 中の Agr は、Independent Active Agr in situ である。(45ii) によって、その最大投射 (XP) が空移動する場合、(45i) によって指定される GC (X') 範疇は XP 範疇に拡張される。最初に、用例 (1) を検討する。(1) の構造 (6) において、matrix Agr₁ が基底生成された位置にある QP (*tous*) に対して SUBJECT として機能する(当該 Agr₁ は、Independent (Active) Agr in situ である)。つまり、matrix Agr' が当該 QP の GC となる。結果として、残置された QP (*tous*) の matrix SPEC (T) への移動が可能となる。これは、(1b) を生成する。また、残置された QP は、基底生成された位置にとどまることも可能である。さらに、embd. SPEC (V) から matrix SPEC (T) の間にある SPEC 位置へ移動することも可能である (SPEC (Agr₂) への一時停止は排除される)。embd. V の sister 要素が clitic で実現された場合、当該 clitic の GC となるのは matrix SPEC (Agr₁) である(当該 clitic は、matrix Agr₁ へ義務的に移動する)。この説明法により、以下の予測が可能となる(前述のように、(1c) は生成不能として非文と予測される)。

- (46) a. *les enfants tous ont vu ce film
 b. les enfants ont vu tous ce film
 c. les enfants l'ont tous vu
 d. les enfants l'ont vu tous

- e. *les enfants tous l'ont vu
'all the children have seen this movie/it'

次に, Faire (Laisser) 使役構文の用例 (12) を検討する. その構造 (13) において, 不定法形態は matrix V (*laiss-*) の VGS 位置へ移動し, さらに, 当該 V₀全体が Asp 位置へ付加移動する (cf. (15)). QP (*tous*) の GC となるのは, matrix Agr' である (つまり, 残置された QP (*tous*) の移動上限として matrix SPEC (T) が指定される). この説明法は (12) を適切に文法的と予測する ((12) d) は, QP (*tous*) が SPEC (Asp) 位置へ移動した場合の派生である. clitic で実現される embd. V の sister 要素の GC となるのは matrix AgrP である. また, 仮説 (5) は不定法 AgrP 中の主語 QP にも妥当すると考える ((12) の主語 DP (*ce garçon*) は, embd. VP に右方付加した位置に生成される). これにより, 以下の予測が可能となる.

- (47) a. mes amis l'ont tous laissé/fait manger à ce garçon
b. mes amis l'ont laissé/fait manger tous à ce garçon
c. mes amis l'ont laissé/fait tous manger à ce garçon
d. *mes amis ont le tous laissé/fait manger à ce garçon
e. *mes amis ont le laissé/fait manger tous à ce garçon
f. *mes amis ont le laissé/fait tous manger à ce garçon
'all my friends have let/made this boy eat it'
- (48) a. Jean ont laissé/fait manger la soupe à tous ses amis
b. *Jean ont leur laissé/fait manger la soupe à tous²⁰⁾
'Jean has let/made all his friends/them eat the soup/it'

知覚構文 (Laisser 使役構文) の用例 (16) を検討する. その構造 (17) において, 基底生成された位置にある QP (*tous*) の GC となるのは matrix Agr' である. よって, 残置された QP (*tous*) は基底生成された位置にとどまる, あるいは, matrix SPEC (T) 位置まで移動する (不定法形態の動詞は, embd. T 位置にある). よって, 知覚構文 (Laisser 使役構文) において, 残置された QP が不定法形態に後続する派生は生成不能として非文と予測される (16b, d). また, (16d) の主語 clitic (*le*) は embd. SPEC (T) 位置において matrix V (*laiss-*) から Acc を付与される. 当該 SPEC (T) 位置にある clitic (*le*) の

GCとなるのは, matrix AgrPである(よって, 当該 clitic は matrix Agr 位置へ付加移動する). (16c)は, VGCHによる格付与が発動した場合の派生である. 基底生成された位置にある主語 clitic (*lui*)のGC, 残置されたQPのGCとなるのは, それぞれ matrix AgrPと matrix Agr'である. 結果として, 以下の予測が可能となる.

- (49) a. mes amis laisseraient tous ce garçon manger de la salade
 b. mes amis le laisseraient tous manger de la salade
 c. mes amis lui laisseraient tous manger de la salade
 'all my friends let this boy/him eat the salad'

embd. Vの主語がQPとして生起する以下の(50)の用例はどうであろうか.

- (50) a. je laisserai/verrai tous mes amis manger la soupe
 b. je laisserai/verrai mes amis manger tous la soupe
 c. *je laisserai/verrai mes amis manger la soupe tous
 'I will let/see all my friends eat the soup'

(50a)は, matrix Vが embd. SPEC (T) 位置へ移動したQP (*tous mes amis*)全体に Acc を付与する派生として説明される(構造(17)). embd. VPに左方付加した位置に生成されるQPの一部であるDP (*mes amis*)が embd. SPEC (T) 位置へ移動した場合, 当該DPは残置されたQP (*tous*)に対して SUBJECTとして機能する(つまり, embd. TPがGCとなる). よって, 残置されたQPの移動上限として, embd. SPEC (V)が指定される. これにより, (50b)の文法性が説明される. 主語QPが embd. VPに左方付加した位置に生成された場合には, DP (*mes amis*)がDP (*tous*)を残置する移動は許容されない(仮説(5)). これは, (50c)を非文と予測する. また, (50b)を説明する論法は以下の予測を可能にする.

- (51) a. *je tous laisserai/verrai mes amis manger la soupe
 b. *je laisserai/verrai tous mes amis manger la soupe
 c. *je laisserai/verrai mes amis tous manger la soupe

3.2. 次に, (embd.)V の sister 位置に QP が生成される用例を検討する((19a) と (20a) の検討は省略する).

- (52) a. je les ai tous vu(s)/fait(s) lire à Pierre (Quicoli 1976: 65)
 b. je les ai vu(s)/fait(s) lire tous à Pierre
 c. je les ai vu(s)/fait(s) tous lire à Pierre
 'I have seen/made Pierre read them all'

(52) においては, VGCH による格付与が発動する(構造 (15) を参照されたい). clitic(*les*)の移動は問題ない(embd. Agr は, **Independent Active Agr in situ** でない). matrix Agr'が残置された QP (*tous*) の GC となる. よって, 当該 QP の移動上限として matrix SPEC (T) が指定される. 構造 (15) において, 過去分詞形態 (*laissé, vu, fait*) が生起する Agr₂ と不定法形態が生起する位置 (VGS) との間には SPEC (Asp) が存在する. (50c) は QP (*tous*) が当該 SPEC (Asp) 位置へ移動した場合の派生である.

知覚構文 (Laisser 使役構文) ではどうであろうか.

- (53) a. *je les ai tous laissé/vu la nurse examiner (Quicoli 1976: 79)
 b. *je les ai laissé/vu tous la nurse examiner
 c. *je les ai laissé/vu la nurse tous examiner
 d. *je les ai laissé/vu la nurse examiner tous
 e. j'ai laissé/vu la nurse les examiner tous
 f. *j'ai laissé/vu la nurse les tous examiner
 g. *j'ai laissé/vu tous la nurse les examiner
 h. *j'ai tous laissé/vu la nurse les examiner
 'I have let/seen the nurse examine them all'

(53) の構造は, 概略 (17) に対応する. embd. V の sister 位置に生成される clitic(*les*)の GC となるのは, matrix V に下位範疇化される AgrP の SPEC 位置へ移動した TP である (embd. SPEC (T) 位置に移動した主語 DP (*la nurse*)が SUBJECT として機能する. embd. Agr は **Independent Agr in situ** であるが, embd. V の sister 位置にある clitic (*les*) を C 統御しないため, SUBJECT として機能することはない). よって, 当該 clitic は, embd. T 位置

へ義務的に移動する(これにより, (53a-d) が非文と予測される). 構造 (17) において, 残置されたQP (*tous*) のGCとなるのは *embd. TP* である(当該TのSPEC位置に移動した主語DP (*la nurse*) がSUBJECTとして機能する). よって, 当該QP (*tous*) の移動上限として *embd. SPEC (V)* が指定される(これにより, (53e-h)の相違が説明される). 同様の論法によって, (21a-d), (22)と(23a-d)が説明される. (21h)の非文性は, *embd. Agr* が **Independent Active Agr in situ** となる, つまり, *embd. Agr'* がQP (*tout*) のGCとなることから説明可能である. 当該QPの移動上限として *embd. SPEC (T)* が指定される. 結果として, (54b) が文法的と予測される.

(54) a. *j'ai tout voulu que Marie mange (=21h)

b. j'ai voulu que Marie mange tout

'I have hoped that Marie will eat everything'

3.3. 次に, RESTR Construction と Raising Construction の用例説明と, 本稿の仮説群による予測体系を示す. (26) を検討する(便宜上, (55) として再掲する).

(55) a. elle a voulu les lire tous (Jaeggli 1982: p. 67, 2. 18a-c)

b. elle a voulu tous les lire

c. elle a tous voulu les lire

'she wanted to read them all'

対応する構造 (29) において, clitic (*les*) のGCとなるのは *embd. AgrP* である(当該 *embd. Agr* は **Independent Agr in situ** である). ²¹⁾つまり, 当該 clitic (*les*) は, *embd. Agr* 位置へ付加移動する. この付加移動によって, *embd. Agr* はその sister 要素をL標示可能となる. ここで, 残置されたQP (*tous*) に対して, 当該 *embd. Agr* が **Independent Active Agr in situ** となると考えてみよう. この場合, 当該 *Agr* がQP (*tous*) に対してSUBJECTとして機能する). よって, 残置されたQPのGCとなるのは, *embd. AgrP* である(当該 *AgrP* は空移動している (cf. 仮説 (45)). QP (*tous*) の移動上限として *embd. SPEC (Agr)* が指定されることになる. この論法は, (55c) を非文と予測することになる. 実際には, この *embd. Agr* がSUBJECTとして機能することはない. フ

ランス語の不定法節中の Agr は, **Independent Agr in situ** となる可能性があるが, **Independent Active Agr in situ** として機能することはない。結果として, QP (*tous*) に対して SUBJECT として機能するのは, matrixAgr である (matrix Agr') が当該 QP の GC となる)。つまり, QP (*tous*) の移動上限として matrix SPEC (T) が指定される。この論法は, (55a-c) を文法的と予測する。

Raising Construction における L-Tous はどのように説明されるであろうか。(38) を再検討する (便宜上, (56) として再掲する)。

- (56) a. elle a semblé les avoir tous lus (Quicoli 1976: 95)
 b. *elle a tous semblé les avoir lus (ibid.: 96)
 'she seemed to have read all of them'
 c. *elle les a semblé avoir lus
 d. elle a semblé les avoir lus
 'she seemed to have read them'

対応する構造 (39) において, clitic (*les*) の GC となるのは matrix AgrP である。残置された QP (*tous*) の GC となるのは matrix Agr' である。しかしながら, 仮説 (40) により, clitic (*les*) と QP (*tous*) が Raising V に下位範疇化される AgrP の外部に移動することは許容されない (同じ AgrP 内部の VP に付加した位置に生成される主語 DP (*elle*) が Case Filter の要請から, embd. SPEC (T) 位置を通過している)。結果として, clitic (*les*) は, Aux の不定法形態 (*avoir*) が生起する embd. T 位置へ付加移動する。残置された QP (*tous*) の移動上限として, embd. Agr₂ の SPEC 位置が指定される。²²⁾ (56) を説明する論法は, 以下の (57 (=41)) の予測を可能にする。

- (57) a. elle a semblé les avoir lus tous
 b. *elle les a semblé tous avoir lus
 c. *elle les a semblé avoir tous lus
 d. *elle les a semblé avoir lus tous
 e. *elle a tous semblé les avoir lus
 'she seemed to have read all of them'

(55)において、主語 DP は matrix VP に付加した位置に生成される。よって、QP の移動は、仮説 (40) に抵触しない。前述のように、(53) 中で非文と予測される用例はすべて Tous Binding によって排除される(同時に、仮説(40)によっても排除される)。唯一文法的と予測される (53e) は仮説 (40) に抵触することはない (QP (*tous*) と clitic (*les*) は、embd. V の主語 DP (*la nurse*) が生起する位置 (embd. SPEC (T)) 位置よりも下位の位置に移動する)。Raising Construction において、主語 QP が生成する用例に対してどのような予測がなされるであろうか。

- (58) a. tous mes amis ont semblé avoir lu ce livre
 b. *mes amis ont tous semblé avoir lu ce livre
 c. *mes amis ont semblé tous avoir lu ce livre
 d. *mes amis ont semblé avoir tous lu ce livre
 e. mes amis ont semblé avoir lu tous ce livre
 f. *mes amis ont semblé avoir lu ce livre tous
 'all the friends seemed to have read the book'

対応する構造 (39) において、主語 QP (*tous mes amis*) は embd. VP に左方付加した位置に生成される。(58a)は、当該 QP 全体が matrix SPEC (Agr) へ移動した用例である。残置された QP (*tous*) の GC となるのは matrix Agr' である。仮説 (40) により、当該 QP が embd. SPEC (T) を経由して、Raising V に下位範疇化される AgrP 外部へ移動することはできない。よって、当該 QP (*tous*) の移動上限として embd. Agr₂ の SPEC 位置が指定される。これにより、(58a, e) と (58b-d) の相違が説明される ((58f) は、仮説 (5) によって排除される)。(58) を説明する論法は、以下の予測を可能にする。

- (59) a. tous mes amis ont semblé avoir lu ce livre
 b. *tous mes amis l'ont semblé avoir lu
 c. *mes amis ont tous semblé l'avoir lu
 d. *mes amis ont semblé l'avoir tous lu
 e. mes amis ont semblé l'avoir lu tous ²³⁾
 'all the friends seemed to have read the book/it'

最後に、RESTR V と Faire (Laisser) 使役構文が共起する用例を検討する。

(60) a. je voudrais lui laisser tout manger (Quicoli 1976: 12-13)

b. je voudrais tout lui laisser manger

'I would like to let him(dat) eat everything'

c. j'ai tout voulu lui laisser manger (ibid.: 14)

'I have wanted to let him(dat) eat everything'

d. *je voudrais tout la laisser manger (ibid.: 55)

e. je voudrais la laisser manger tout

'I would like to let her(acc) eat everything'

(60a-d) の構造は、概略 (36a) に対応する (VGCH による格付与が発動する)。構造 (36a) において、embd. V の主語 clitic (*lui*) と空の clitic (*e*) に対して SUBJECT として機能するのは、SPEC(C) へ空移動した AgrP の主要部である。同じ AgrP が両 clitic の GC となる。よって、両 clitic は当該 AgrP の主要部へ付加移動する (後述するように、当該 Agr の MSS 位置に不定法形態 (*laisser*) が移動する。前述のように、clitic の移動を受けた当該 AgrP の主要部は、その sister 要素 (TP) の「障壁」性を相殺する。これにより、不定法形態 (*laisser*) は、SPEC(C) へ空移動した AgrP の主要部の MSS 位置へ移動可能となる (つまり、不定法形態 (*laisser*) は、構造 (36a) における β 位置に先行する)。一方、不定法形態 (*manger*) は、V (*laiss-*) の VGS 位置へ移動する。残置された QP (*tout*) の GC となるのは、V (*voul-*) がその主要部位置へ移動する matrix Agr' である。つまり、(60a) の派生は、当該 QP が β 位置へ移動した場合のそれとして説明される。(60b-c) は、当該 QP (*tous*) が α 位置、あるいは、さらに上位の SPEC(T) 位置へ移動した派生として説明される。結果として、Tous Binding は (60a-c) を文法的と予測する。

一方、仮説 (40) は (60a-c) をすべて非文と予測する。それは、主語 clitic (*lui*) と残置された QP (*tout*) が δ 位置を経由する派生が生成するためである。この場合、何らかのプロセスによって、仮説 (40) の適用を阻止する必要がある。(60a-c) において、VGCH による格付与が発動する点に留意されたい (つまり、V (*laiss-*) と t_j 位置へ移動した不定法形態 (*manger*) が VGCH という複合構成要素 (Constituent) を形成する)。ここで、仮説 (40) を適用条件を付加した (61) に修正する。

(61) Hypothesis :

An XP element which is base-generated in the embd. AgrP (CP) with a matrix SPEC or Y⁰ position as its final landing site has to move through the SPEC position of the embd. TP vacuously moved to the embd. SPEC (Agr), if the head of the vacuously moved TP does not form any complex constituent with the matrix V sub-categorizing the embd. AgrP.

これにより、(60a-c)は、Tous Bindingと仮説(61)によって課される規制の双方を満たすことになる。(60d)に対応する構造では、不定法形態(*manger*)は、構造(36a)の t_j 位置にある(この場合、VGCHが形成されない)。 δ 位置へ移動し、Accを付与され主語 clitic (*la*)は、残置されたQP (*tout*)に対してSUBJECTとして機能する(つまり、 δ を含む最小の最大範疇であるTPが当該QPのGCとなる。 δ 位置にあるclitic(*la*)のGCとなるのは、V (*voul-*)によって下位範疇化されるAgrPである)。よって、QP(*tout*)の移動上限として、当該主語 clitic (*la*)が基底生成されるVのSPECが指定される。つまり、(60d)は、Tous Bindingと仮説(61)の双方に抵触するため、非文と予測される。Tous Bindingと仮説(61)の規制の双方を満たすのは、(60e)である。

4. 残置されたQPの移動とWH要素の移動

以下の用例(62)は、Tous Bindingと仮説(61)の規制を満たす派生のみが文法的と判断されることを例証する。

(62) a. les enfants que j'ai tous laissé examiner à la nurse

(Quicoli 1976: 83)

b. *les enfants que j'ai tous laissé la nurse examiner (ibid.: 85)

'the children which I have let the nurse examine all'

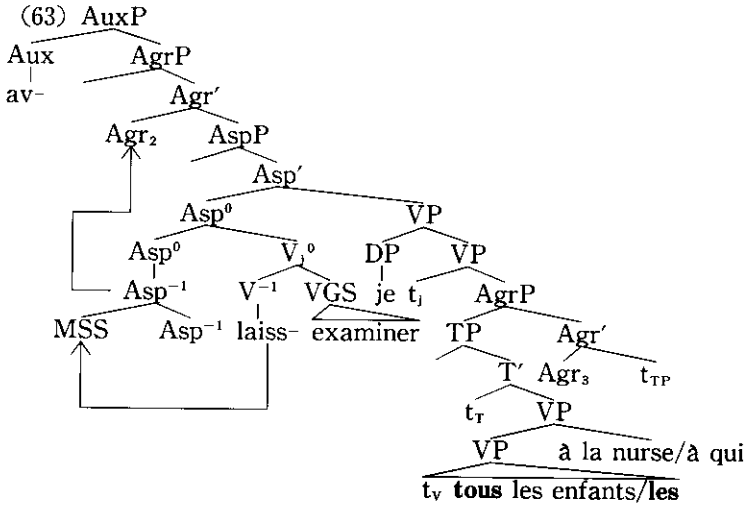
c. la nurse à qui je les ai tous laissé examiner (ibid.: 89)

d. *la nurse que je les ai tous laissé examiner (ibid.: 90)

'the nurse who I let examine them all'

(62a, c)に対して、以下の構造(63)が想定される。(63)において、VGCHによる格付与が発動している。SPEC(Agr₃)位置へ空移動するTPのSPEC位

置は空である。仮説 (61) により, WH 要素と clitic 要素は, 当該 SPEC 位置を経由する必要はない。残置された QP (*tous*) と clitic (*les*) の GC となるのは, それぞれ, Aux 要素の最終着地点となる matrix Agr の投射 (Agr') と最大投射 (AgrP) である。



よって, QP (*tous*) は, V (*laiss-*) に下位範疇化される AgrP 内部から上位 SPEC 位置へ移動可能となる(当該 AgrP 内部にとどまることも可能である)。clitic (*les*) は, Aux 要素の最終着地点である matrix Agr 置へ義務的に付加移動する。これは, (62a, c) の文法性を適格に説明する。さらに, 以下の予測も可能となる。

- (64) a. les enfants que j'ai **tous** laissé examiner á la nurse
 b. les enfants que j'ai laissé **tous** examiner á la nurse
 c. les enfants que j'ai laissé examiner **tous** á la nurse
 'the children which I have let the nurse examine all'
 d. la nurse á qui je **les** ai **tous** laissé examiner
 e. la nurse á qui je **les** ai laissé **tous** examiner
 f. la nurse á qui je **les** ai laissé examiner **tous**
 'the nurse who I let examine them all'

(62b, d)において, VGCH による格付与は発動しない(VGS も存在しない). よって, 仮説(61)が発動する. 不定法形態(*examiner*)は, 構造(63)の embd. T 位置にある(embd. V の主語 DP (*la nurse, que*) は embd. SPEC (T) 位置へ移動し, Acc を付与される. 残置された QP (*tous*) と clitic (*les*) の GC となるのは, 共に, embd. TP である(当該 SPEC (T) 位置へ移動した主語要素が SUBJECT として機能する). よって, clitic (*les*) は当該 T 位置へ付加移動する. 残置された QP (*tous*) の移動上限として embd. SPEC (V) が指定される. 結果として, (62b,d)は, Tous Binding に抵触し, 非文と予測される(同時に, 仮説(61)にも違反する). この論法により, 以下の予測が可能となる.

- (65) a. *les enfants que j'ai laissé la nurse examiner **tous**
 b. *les enfants que j'ai laissé la nurse **tous** examiner
 c. *les enfants que j'ai laissé **tous** la nurse examiner
 d. *les enfants que j'ai **tous** laissé la nurse examiner
 'the children which I have let the nurse examine all'
 e. *la nurse que j'ai laissé **les** examiner **tous**
 f. *la nurse que j'ai laissé **tous les** examiner
 g. *la nurse que j'ai **tous** laissé **les** examiner
 'the nurse who I let examine them all'

つまり, VGCH による格付与が発動しない場合の Laisser 使役構文(知覚構文)の用例はすべて, 仮説(61)に抵触するため, 非文と予測されることになる. SPEC (C) 位置へ移動する WH 要素が仮説(61)に従わないと前提した場合には, (65a)と(65e)が文法的と予測されることになる. しかしながら, 以下の用例(66)が示すように, この前提は不適切なものである.²⁴⁾

- (66) a. *à qui a-t-il donc laissé Jean répondre ? (Bordelois 1982: (64))
 'who did he let Jean reply to ?'
 b. *à qui a-t-il donc laissé Jean porter ce message ? (ibid.)
 'who did he let Jean take this message to ?'

5. イタリア語との相違

本節では, 以下の相違が検討される(L-Tous, L-Tutti). フランス語に対して

想定した Tous Binding は、イタリア語にも適用される。²⁵⁾

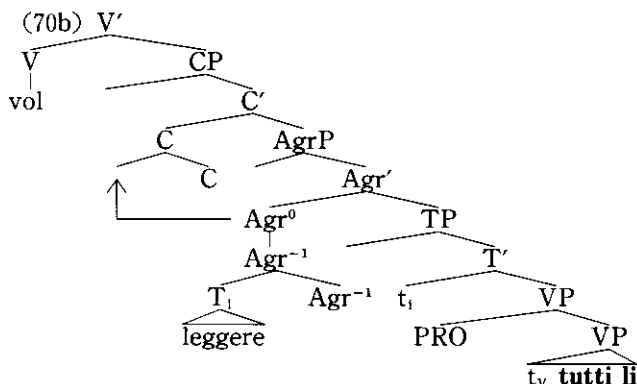
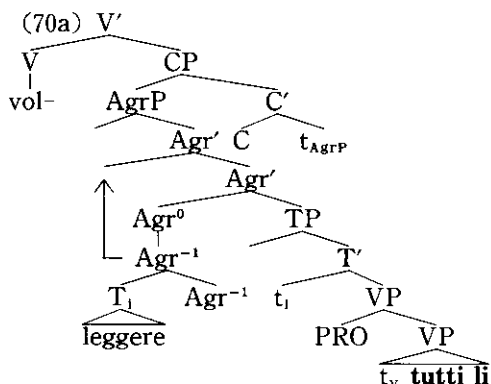
- (67) a. *Jean a tout mangé* (Quicoli 1976: 7, 6)
 b. *Jean a mangé tout 'Jean has eaten everything'*
 c. **ha tutto* visto (Doetjes 1992: fn. 9)
 d. *ha visto tutto* 'he has seen everything'
- (68) a. *elle a voulu les lire tous* (Jaeggli 1982: p. 67, 2. 18a-c)
 b. *elle a voulu tous les lire*
 c. *elle a tous voulu les lire*
 'she wanted to read them all'
 d. (?)*Gianni vuole tutti leggerli* (Doetjes 1992: 30a-b)
 e. *Gianni li vuole tutti leggere*
 f. *Gianni li vuole leggere tutti*
 'Gianni wants to read them all'
- (69) a. *il a promis de tous les lire* (Doetjes 1992: 27b)
 b. **ha promesso di tutti leggerli* (ibid.: 27a)
 c. *ha promesso di leggerli tutti* (ibid.: 28)
 'he has promised to read them all'

(67a-b) は、本稿で設定した構造 (24) によって説明可能である。つまり、*tout* は Q であり、空の clitic (*e*) を下位範疇化する。イタリア語用例 (67c, d) の相違は、当該言語における *tutto* を DP と想定することにより説明される。つまり、QP (*tout*) の場合と異なり、当該 DP (*tutto*) が上位の位置へ移動する引き金が存在しない (よって、当該要素 (*tutto*) は基底生成された位置にとどまる)。

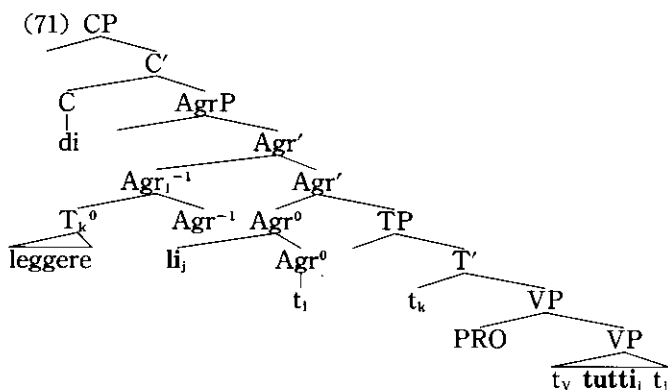
イタリア語の不定法 AgrP (CP) において、V は、T 位置を経由して Agr 位置まで移動する (cf. Belletti 1990)。また、V を含む T の複合体が移動した不定法 AgrP 中の Agr はその sister 要素を L 標示すると考えられる。つまり、イタリア語における Independent Agr in situ は、Independent Active Agr in situ と等価である (fn. 19 で指摘したように、イタリア語では CPC に類似する規制 (QPC) が適用される点に留意されたい。つまり、残置された QP の Movement Strategy が発動した場合、当該 QP はその GC 内にある最上位の SPEC 位置まで移動する)。 (68d-e) に構造として、(70a-b) が想定される。(70a) に

において, clitic (*li*) の GC となるのは embd. AgrP である (embd. Agr が SUBJECT として機能する). embd. AgrP はまた, QP (*tutti*) の GC でもある (当該 AgrP は空移動している). 結果として, clitic (*li*) は embd. Agr 位置へ付加移動し, 残置された QP (*tutti*) は embd. SPEC (Agr) へ移動する. これにより, (68d) が生成される.²⁶⁾

(70b) において, embd. Agr は基底生成された位置にない (よって, SUBJECT として機能することはない). clitic (*li*) と QP (*tutti*) の GC となるのは, それぞれ, matrix AgrP と matrix Agr' である. つまり, 当該 clitic は, matrix Agr 位置へ付加移動する. 残置された QP に対する Movement Strategy が発動した場合には, 当該 QP (*tutti*) は matrix SPEC (T) まで移動する. この Movement Strategy が発動しない場合には, (68f) が生成する.

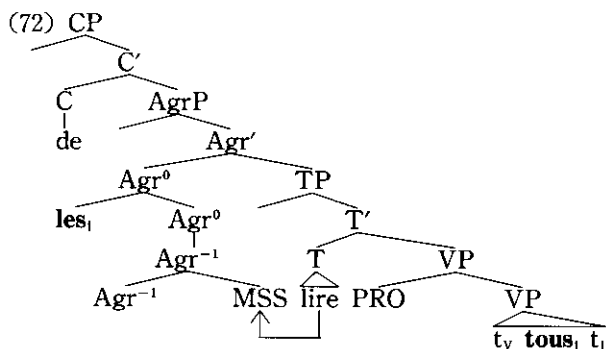


(69b-c) の embd. CP の構造として、以下の (71) が想定される。



QP(*tutti*)と clitic(*li*)に対して SUBJECT として機能するのは、embd. Agr である。よって、当該 QP の GC となるのは、embd. Agr' である。embd. AgrP が当該 clitic の GC となる。clitic (*li*) は embd. Agr 位置へ付加移動する。また、残置された QP (*tutti*) の移動上限として embd. SPEC (T) が指定される。これにより、(69b-c) の相違が説明される ((69b) は Tutti Binding に抵触する) ((69c) は、QP に対して Movement Strategy が発動しない場合の派生と同形である)。

フランス語用例 (69a) の構造として、以下の (72) が想定される。



clitic(*les*)の GC となるのは embd. AgrP である。前述のように、clitic(*les*)

が Agr⁰位置に付加することにより、当該 Agr⁰はその sister 要素である TP を L 標示する (TP ≠ bar.). これにより、T 位置にある不定法形態の動詞の MSS 位置への移動が可能になる。残置された QP (*tous*) はどの SPEC 位置へ移動するのか。(72)の構造では、当該位置として指定されるのは、embd. SPEC(Agr) 位置のみである。ところで、残置された QP (*tous*) の GC を構成する範疇は何であろうか。embd. Agr は **Independent Active Agr in situ** でない。matrix Agr' が当該 QP の GC となる (matrix Agr が **Independent Active Agr in situ** となる)。これは、(69a) と共に、以下の (73a-b) を生成する。

(73) a. il a tous promis de les lire^{27/28)}

b. il a promis de les lire tous

'he has promised to read them all'

6. 結語

本稿において、(42-45) の Tous Binding の定義体系の基づく R-Tous と L-Tous の挙動を共通に説明する論法が提案された。(73a)の文法性判断に関する問題等、さらに検討すべき問題がある。これらの問題を調査した上で、本稿で設定された仮説群の修正が必要であることは言うまでもない。最後に、以下の用例 (74) について若干言及する。

(74) (Doetjes 1992: 18a-c)

a. les enfants_i ont promis de tous_i saluer Marie

b. les enfants_i ont promis de saluer tous_i Marie

c. ?*les enfants_i ont promis de saluer Marie tous_i,

'all the children have promised to greet Marie'

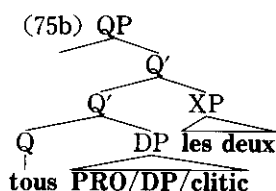
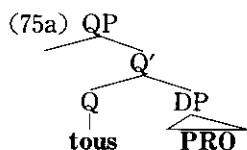
d. les enfants_i ont promis de saluer Marie tous_i les deux

'both the children have promised to greet Marie'

本稿では、QP の移動が、当該 Q によって下位範疇化される DP が何らかの引き金によって上位範疇位置へ移動した場合に限り発動すると想定される。

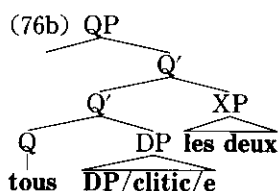
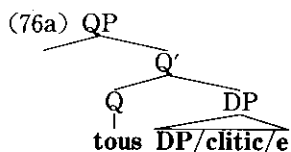
(74a-c) において、主語 DP (*les enfants*) は matrix VP に付加した位置に生成される。embd. VP に左方付加した位置に基底生成される主語 QP (*tous*) の移動を可能にする要因は何であろうか。embd. CP 中の主語 QP は、以下の

(75a) の構造をもち、DP (*PRO*) が何らかの要因によって、embd. CP 内の上位 SPEC 位置へ移動すると考えてみよう ((74d) の QP に対しては、(75b) の構造を想定する)。これは、DP(*PRO*)の移動によって残置された主語 QP の移動を可能にする (cf. 構造 (72))。



ここで、問題が惹起する。構造(72)において、TPは「障壁」を構成する(この場合、Agr位置にcliticが付加移動していない。よって、不定法形態はT位置にとどまる)。よって、DP(*PRO*)はSPEC(T)位置へ移動することになる。この論法は、(74a)を非文と予測することになる。SPEC(T)位置にはDP(*PRO*)が移動しており、TPが「障壁」となる。結果として、残置されたQP(*tous*)のSPEC(Agr)への移動が排除される。この問題は、何らかのプロセスによって、構造(72)におけるTPの「障壁」性が相殺されると想定することにより打開されるであろう。

本稿では、QP(*tout*)に対して想定した(24)に類似する構造(76a)を想定して論を進める((74d)に対しては(76b)を想定する)。つまり、Qが空であるclitic(*e*)を下位範疇化可能と考える。



構造(72)において、この空のclitic(*e*)はAgr位置に付加移動する。これにより、当該Agrのsister要素(TP)の「障壁」性が相殺され、不定法形態のMSS位置への移動が可能となる。残置されたQP(*tous*)は、基底生成された位置にとどまる、あるいは、SPEC(Agr)(SPEC(T))位置へ移動する。こ

の論法は、(74a-c)の相違を説明する。(74c)は、主語QP (*tous e*)がVPに右方付加した位置に生成されるため、非文と予測される(仮説(5))。同様の論法は、以下のRESTR Constructionの用例(77a)を適切に文法的と予測する。

(77)

- a. les gars_i voulaient aller tous_i au cinéma (Jaeggli 1982: p. 77, 2. 54b)
 b. les gars_i voulaient tous_i aller au cinéma
 'all the children wanted to go the movies'

概略(77)に対応する構造(29)において、空のDP clitic (*e*)はembd. Agr位置へ付加移動する(embd. TPの「障壁」性が相殺され、不定法形態の動詞がembd. AgrのMSS位置へ移動する)。残置されたQP (*tous*)のGCとなるのは、matrix Agr'である。よって、当該QPの移動上限としてmatrix SPEC (T)が指定される。つまり、(77a)は、残置されたQPが基底生成された位置にとどまる派生、あるいは、embd. SPEC (T) (embd. SPEC (V))へ移動した派生として説明される。(77b)は、当該QPがembd. SPEC(Agr)からmatrix SPEC(T)までのSPEC位置へ移動した派生と考えられる(embd. SPEC(Agr)とmatrix SPEC (T)も当該QPの着地点に含まれる)。²⁹⁾

(74d)の文法性はどのように説明されるか。タイプ(76a)のQPと異なり、タイプ(76b)のQPは、VPに右方付加した位置に生成された場合でもDPの移動を許容すると考える。(76a)のタイプと同様に、タイプ(76b)でも、DPの移動によって残置されたQPが上位のSPEC位置へ移動可能であると考えられる。これは、以下の相違によって例証される。

- (78) a. les enfants ont vu ce film tous les deux (Doetjes 1992: 8a)
 b. ?*les enfants ont vu ce film tous (ibid.: 8b)
 'all/both the children have seen the film'

Vのsister要素(*ce film*)との位置関係から判明するように、(78a)の主語QP (*tous les enfants les deux*)はVPに右方付加した位置に生成される。DP (*les enfants*)は、Case Filterの要請により、matrix SPEC (Agr)位置へ移動する。同様に、(78b)の主語QP (*tous les enfants*)もまた、VPに右方付加した位置に生成される。この場合には、DPのmatrix SPEC (Agr)位置へ

の移動が許容されない(仮説(5)). また、以下の(79)によって示されるように、残置されたQP (*tous les deux*) は上位のSPEC位置へ移動可能である。この論法により、以下の予測(80)が可能となる。(80c-d)の予測の適格性は、(81)によって例証される。

- (79) a. il les a repris tous (Kayne 1975: p. 38, 86c-d)
 b. il les a tous repris 'he took them all back'
 c. il les a repris tous les deux (Kayne 1975: p. 38, 87c-d)
 d. il les a tous les deux repris 'he took them both back'
- (80) a. les enfants_i ont promis de tous_i les deux saluer Marie
 b. les enfants_i ont promis de saluer tous_i les deux Marie
 'both the children have promised to greet Marie'
 c. les enfants ont vu tous les deux ce film
 d. les enfants ont tous les deux vu ce film
 'both the children have seen the film'
- (81) (Kayne 1975: p. 46, 107a-e and p. 47, 109) ³⁰⁾
 a. les soldats ont tous les deux été présentés à Anne par ce garçon
 b. les soldats ont été tous les deux présentés à Anne par ce garçon
 c. les soldats ont été présentés tous les deux à Anne par ce garçon
 d. *les soldats ont été présentés à Anne tous les deux par ce garçon
 e. *les soldats ont été présentés à Anne par ce garçon tous les deux
 f. *les soldats tous les deux ont été présentés à Anne par ce garçon
 'the soldiers were both introduced to Anne by that boy'

註

- 1) clitic要素には、下線を付す。Quantifierには、二重下線を付す。
- 2) フランス語の[+Finite]AgrP内に生起する主語要素は、VPに左方付加した位置に生成されると考える。Stylistic Inversion等の特殊な場合には、主語要素がVPに右方付加した位置に生成可能である。
- 3) DP (*les enfants*)は、SPEC(Q)位置を経由して移動すると考える。SPEC-HEAD Agreementの適用により、Q(*tous*)とDPは同一指標の関係となる。また、QPに対するCase Filterの要請は、QP、あるいはDPに格が付与されることにより満たされると想定する。第6節で検討するように、Control Constructionのembd. CP中の主語QP(*tous e*)は、Case Filterの要請を満たす必要はない。換言すれば、空のclitic(*e*)を下位範疇化するQの最大投射に対してCase Filterは適用されない。L-Tousに対しても同様の前

提が設定される。

- 4) cliticの付加移動 (Cliticization) に関しては後述する。
- 5) Aux 要素の構造に関しては, Belletti (1990)を参照されたい。英語の場合と異なり, ロマンズ諸語において VP-Preposing は観察されない。これは, ロマンズ諸語の Aux がその sister である AgrP を θ 統率しないことを物語るものであろう (cf. Haverkort 1992: p. 199)。結果として, 当該 AgrP が「障壁」(Barrier) となる可能性が生じる。つまり, DP (*les enfants*) の matrix SPEC (Agr) への移動が排除される可能性が生まれる。しかしながら, この「障壁」性は, Aux に下位範疇化される AgrP が当該 SPEC (Aux) 位置へ空移動すると考え, 更に, 以下の (i) の L 標示定義を採用することにより相殺される。
 - (i) definition of L-Marking: Where α is a lexical category, α L-marks β iff β agrees with the head of γ that is θ -governed by α . (Chomsky 1986: p. 24)
 任意の最大範疇 (XP) がそれ自身とその主要部 (X) 一致すると前提すると, α はそれが θ 統率する範疇 β を L 標示することになる。
- 6) (1b) で観察されるように, Aux (*avoir*) による能動完了時制における主語 DP (QP) は過去分詞形態 (*vu*) と性・数に関して一致することはない。仮に, 当該主語要素が SPEC (Agr_s) を通過すると考えた場合, SPEC-HEAD Agreement により, 過去分詞形態は男性複数形 (*vus*) で生起することになる。
- 7) 仮に, PP (*à la guerre*) は VP に右方付加した位置に生成されると考える。
- 8) 知覚構文でも同様である。後述するように, Laisser 使役構文は, 知覚構文と Faire 知覚構文の準動を示す。
- 9) 詳細は, 石岡 (1993, 1994) を参照されたい。VGCH による格付与に関して, 以下の (i) が前提されている。
 - (i) a. VGCH has the Case Array ____ Acc(Dat).
 b. Case-assignment is optional.
 c. When a verb assign Case, its entire Case Array must be assigned.
 d. Acc is assigned only under Adjacency.
 e. VGCH loses its property of assigning Case when the Case in question has already been assigned by the embd. V(*t_v*).
 f. In the perception construction and Laisser causative, matrix V has the Case Array ____ Acc ((i-a-d) adapted from Goodall 1987)
 VGCH が DP (*de la salade*) と主語 DP (*ce garçon*) のそれぞれに Acc, Dat を付与するためには, VGCH と DP (*de la salade*) が隣接する必要がある (Adjacency)。結果として, embd. V の主語 (*ce garçon*) は, VP に右方付加した位置に生成されることになる。(13)において, Agr₁の最大投射が SPEC (Aux) 位置へ移動する表示は省略される。
- 10) 以下で, X⁰ と X⁻¹ は特段の区別なしで用いられる。
- 11) この移動を可能にするため, Guasti (1991) は相対化された最小原理 (Relativized Minimality) と C 統御 (C-Command) を (i-ii) のように修正する (この修正の適格性に関しては, 本稿では言及されない)。
 - (i) Relativized Minimality (Guasti 1991: 19) :
 X β -governs Y iff there is no Z such that:
 (a) Z is a base position;
 (b) Z is β -GT compatible with Y;
 (c) Z c-commands Y but it does not c-command X, where $\beta = [A, A', X^0, X^{-1}]$
 - (ii) The definition of c-command (Guasti 1991: fn. 11) : α c-commands β iff at

least one segment of α does not dominate β and for every X' projection γ if γ dominates α then γ dominates β .

(13) に対応するイタリア語用例に関しては、石岡 (forthcoming) を参照されたい。

12) この場合の clitic 移動 (Cliticization) に関しては後述する。

13) 詳細に渡る検討は稿を改めるが、スペイン語においては、L-Todos が存在しないと考えられる。(i-ii) で示されるように、スペイン語では、Redoubled Clitic (RC) Strategy が発動すると思われる。

(i) a. *las ví a todas las mujeres (Jaeggli 1982: p. 63) 'I saw all the women'

b. las ví (a) todas (ibid.) 'I saw them all'

c. lo ví todo (ibid.: p. 70)

(ii) a. Pedro ha querido verlos todos (Jaeggli 1982: p. 75)

b. *Pedro ha todos querido verlos (ibid.) 'Pedro wanted to see them all'

14) Ouhalla (1989) では、不定法 CP が Agr の投射を欠くと前提される。

15) Accessibility は以下のように定義される。

α is accessible to β iff β is in the c-command domain of α and coindexing of (α , β) would not violate the i/i condition (cf. Aoun 1985: p. 30).

詳細は、石岡 (1993, 1994a, b) を参照されたい。なお、石岡 (1994a, b) では、主として、clitic の基底生成を規制する XP Binding の概念も導入される。本稿で前提される束縛理論では、PRO が SUBJECT となることはない。

16) Kayne (1989) と同様に、Cliticization において、移動によって空となった X^0 範囲への付加移動は排除され、Relativized Minimality が発動しないと前提する。

17) 詳細は、石岡 (forthcoming) を参照されたい。第 5 節でも検討される。

18) 第 3, 4 節においても、仮説 (40) が適用される。

19) 以下の定義体系は、R-Tous と L-Tous の双方に適用される。(22) の用例が示すように、Tous X^0 Binding では CPC に対応する規制が存在しない。対応するイタリア語の Tutti X^0 Binding では、CPC に類似する規制が発動する。石岡 (forthcoming) では、イタリア語に対して、以下の規制 (i) が想定される。

(i) QP Placement Constraint (QPC):

A stranded QP must move to the SPEC position of the highest functional X^0 element in its governing category if the movement strategy is adopted, (general principles of UG allowing).

定義 (45) は、イタリア語に対しても設定される。

20) 以下の (i) が示すように、Dat を付与された QP もまた上位の SPEC 位置へ移動する。

(i) a. j'ai parlé à tous mes amis

b. je leur ai parlé à tous (Milner 1987: 26c)

c. je leur ai parlé tous 'I spoke to all my friends/they all'

21) 対応する構造 (35) に基づく派生の検討は省略する。

22) 以下の用例が示すように、主語 QP (DP) は embd. Agr₂ の SPEC 位置を通過しないと考えられる ((1b) の過去分詞形態は主語要素と一致している)。

(i) a. elle a semblé avoir lu ce livre

b. *elle a semblé avoir lue ce livre 'she seemed to have read the book'

23) 言うまでもなく、(59e) の主語 QP (tous mes amis) は embd. VP に左方付加した位置に生成される。

- 24) (66a,b) の対比は、対応するイタリア語用例 (i) でも観察される。
 (i) a. ?*il cavallo che non so mai chi lasciare montare è il baio (Burzio 1978: 90)
 b. il cavallo che non so mai a chi lasciare montare è il baio (ibid.)
 'the horse that I never know who to let ride is the bay'
- 25) R-Tutti に関しては、石岡 (forthcoming) を参照されたい。
- 26) 言うまでもなく、(70a) 構造において、Movement Strategy が発動しない場合には、以下の (i) が派生する。
 (i) Gianni vuole leggerli tutti 'Gianni wants to read them all'
- 27) 恐らく、(73a) は非文であろう (未調査)。その場合、例えば、以下の仮説が必要となる (更なる検討が必要)。
 (i) Hypothesis: The stranded QP cannot move from within the AgrP subcategorized by a prepositional C.
- 28) 本稿の仮説群は、以下の (ib) を説明できない。
 (i) a. *voglio tutti_i che pro_i vengano (Doetjes 1992: fn. 9)
 b. je veux tous_i qu'ils_i viennent
 c. voglio che tutti_i pro_i vengano
 d. *voglio che tutti_i vengano pro_i
 e. voglio che pro_i vengano tutti_i 'I want them all come'

イタリア語用例 (ia) において、*pro* の移動によって残置された QP (*tutti*) の GC となるのは *embd. Agr'* である。これにより、(ic-e) の予測が可能となる。(ia) を説明する論法は、(ib) を非文と予測する。何らかのプロセスにより、DP (*ils*) の移動によって残置された QP (*tous*) の GC を *embd. Agr'* から *matrix Agr'* へ拡張する必要がある (この問題は、稿を改めて検討する)。

- 29) フランス語の場合と異なり、イタリア語 (スペイン語) の不定法 AgrP (CP) 中の V は T を経由して Agr 位置まで移動すると考えられる (V を内包する T の複合体が移動した Agr は、その sister 要素 (TP) を L 標示する)。つまり、イタリア語 (スペイン語) の対用例 (i) において、(75a) の構造を想定した説明が可能となる (フランス語用例 (74) で観察された問題は起こらない)。
 (i) (Jaeggli 1982: p. 76, 2. 49b and p. 77, 2. 53b)
 a. quei ragazzi_i hanno deciso di PRO_i andare tutti_i al cinema
 b. esos muchachos_i decidieron PRO_i ir todos_i al cine
 'all those boys have decided to go to the movies'
PRO は基底生成された位置から *embd. SPEC (Agr)* 位置へ移動すると考える (残置された QP (*tutti*, *todos*) の GC となるのは、*embd. Agr'* (*AgrP*) と考えられる)。これらの前提が妥当する場合、以下の予測 (ii) が可能となる。
 (ii) a. *quei ragazzi_i hanno deciso di tutti_i andare al cinema
 b. *esos muchachos_i decidieron todos_i ir al cine
 'all those boys have decided to go to the movies'

- 30) (81d-f) の非文性は、QP (*tous les soldats les deux*) が V の sister 位置に基底生成され、*matrix Agr* と *matrix SPEC (Agr)* との間に QP (*tous les deux*) の着地点となる *SPEC* 位置が存在しないことにより説明される。

参考文献

- Aoun, J. (1985). *A Grammar of Anaphora*. MIT Press, Cambridge (Mass.)
- Baker, M. C. (1988). *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Belletti, A. (1990). *Generalized Verb Movement*. Rosenberg & Selier, Torino.
- Bonet, E. (1990). "Subjects in Catalan." *MIT Working Papers in Linguistics* 13, 1-26.
- Bordelois, I. (1982). "Transparency." *Linguistic Analysis* 9, 161-203.
- Bordelois, I. (1988). "Causatives: From Lexicon to Syntax." *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 57-93.
- Burzio, L. (1978). "Italian Causative Constructions." *Journal of Italian Linguistics* 3, 1-71.
- Burzio, L. (1986). *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Reidel, Dordrecht.
- Doetjes, J. (1992). "Rightward Floating Quantifiers Float to the Left." *The Linguistic Review* 9/4, 313-332.
- Giusti, G. (1991). "The Categorical Status of Quantified Nominals." *Linguistische Berichte* 136, 438-454.
- Goodall, G. (1987). "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives." Neidle, C. and Rafael A. Nuñez Cerdeño (eds.) *Studies in Romance Languages*. Foris, Dordrecht.
- Guasti, M. T. (1991). "Incorporation, Excorporation and Lexical Properties of Causative Heads." *The Linguistic Review* 8, 209-232.
- Haverkort, M. (1992). "Clitics, Affix Order and the ECP." *WCCFL* 10, 197-207.
- Jaeggli, O. (1982). *Topics in Romance Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Kayne, R. (1973). "L'inversion du sujet en français dans les propositions interrogatives." *Le Français Moderne* 41, 10-42, 130-151.
- Kayne, R. (1975). *French Syntax: the Transformational Cycle*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Kayne, R. (1984). *Connectedness and Binary Branching*. Foris, Dordrecht.
- Kayne, R. (1989a). "Facets of Romance Past Participle Agreement." Benicà, P. (ed.) *Dialect Variation and the Theory of Grammar*. Foris, Dordrecht.
- Kayne, R. (1989b). "Null Subjects and Clitic Climbing." Jaeggli, O. and K. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*. Kluwer, Dordrecht.
- Kayne, R. (1991). "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO." *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991). "The Position of Subjects." *Lingua* 85, 211-258.
- Milner, J. -C. (1987). "Interpretive Chains, Floating Quantifiers and Exhaustive Interpretations." Neidle, C. and R. A. Nuñez Cedeño (eds.) *Studies in Romance Languages*. Foris, Dordrecht.
- Ouhalla, J. (1989). "Clitic Movement and the ECP: Evidence from Berber and Romance Languages." *Lingua* 79, 165-215.
- Ouhalla, J. (1991). *Functional Categories and Parametric Variation*. Routledge, London and New York.
- Pearce, E. (1990). *Parameters in Old French Syntax: Infinitival Complements*. Kluwer, Dordrecht.
- Quicoli, C. (1976). "Conditions on Quantifier Movement in French." *Linguistic Inquiry*

- 7, 583-607.
- Reed, L. (1990a). "Biclausality, Barriers and the French Causative Construction." *Cahiers Linguistiques d'Ottawa* 18, 79-93.
- Reed, L. (1990b). "Adjunctions, X⁰ Movement, and Verbal Government Chains in French Causatives." *MIT Working Papers in Linguistics* 12, 161-176.
- Reed, L. (1991). "The Thematic and Syntactic Structure of French Causatives." *Probus* 3.3, 317-360.
- Reed, L. (1992). "Remarks on Word Order in Causative Constructions." *Linguistic Inquiry* 23, 164-172.
- Rizzi, L. (1982). *Issues in Italian Syntax*. Foris, Dordrecht.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Roberts, I. (1991). "Excorporation and Minimality." *Linguistic Inquiry* 22.1, 209-218.
- 石岡精三 (1992). 「フランス語 *Faire* 使役構文における CM clitics (Case-Marked Clitics) と NCM clitics (Non Case-Marked clitics) の相違について」長岡技術科学大学「言語・人文科学論集」6号, 71-100.
- 石岡精三 (1993). 「Laisser/Faire 使役構文における格付与と Clitic 移動について」『ロマンス語研究』26号, 115-133.
- 石岡精三 (1994a). "Some Facets of Cliticization in the Spanish Causative Construction." *NIDABA* (Linguistic Society of West Japan) 23, 1-12.
- 石岡精三 (1994b). 「フランス語とイタリア語における受動使役構文について」『ロマンス語研究』27号, 53-65.
- 石岡精三 (forthcoming). 「イタリア語における R-Tutti と L-Tutti について」長岡技術科学大学「言語・人文科学論集」8号.